

第 5 回国際協働プロジェクト

The 5th International Student Action Project



【ISAP05】

事業報告書

日本国際学生協会

International Student Association of Japan

目次

第 1 章	国際協働プロジェクト概要	
1-1	実行委員長挨拶	P05
1-2	実行目的	P06
第 2 章	第 5 回国際協働プロジェクト概要	
2-1	第 5 回国際協働プロジェクト概要、協力団体	P08
2-2	第 5 回国際協働プロジェクト日程	P09
2-3	実行委員、スタッフ名簿	P11
第 3 章	プロジェクト報告	
3-1	国内活動概要	P13
3-1-1	事前勉強会	P14
3-1-2	交流会(学童、学生団体)	P16
3-1-3	国外活動報告会	P19
3-2	国外活動概要	
3-2-1	フィールドワーク総括	P21
	・ Dumpsite Tour	P22
	・ Sit in class(授業見学)	P24
3-2-2	協働活動総括	P26
	・ Weekend Kids Activity	P27
	・ 食育活動	P30
	・ 歯磨き活動	P35
	・ 手洗い活動	P37
	・ オープニングセレモニー、フレンドシップナイト	P39
	・ School Activity(Japanese Culture)	P43
	・ Work shop with campers	P46
	・ Interaction with college student	P49
	・ Work Activity	P54

第 4 章	参加者の感想	
4-1	ホームステイ感想(1)	P57
4-2	ホームステイ感想(2)	P59
4-3	第 5 回国際協働プロジェクト スタッフ感想(1)	P60
4-4	第 5 回国際協働プロジェクト スタッフ感想(2)	P62
第 5 章	実行委員長総括	P64
第 6 章	第 5 回国際協働プロジェクト予算書及び決算報告	
6-1	第 5 回国際協働プロジェクト予算書	P66
6-2	第 5 回国際協働プロジェクト決算報告	P68

第 1 章

国際協働プロジェクト概要

実行委員長挨拶

実行目的

1-1

実行委員長挨拶

昨年の12月から約1年間。私達は、国際協働の難しさややりがいを持って体験してきました。そして、たくさんの方々と「協働」があったからこそ、多くの挑戦を行うことができ、困難を乗り越えることができました。第5回の活動を終えようとしている今、前回の活動の反省点や成果を活かし、多くの方々のご協力のもと、意義高い価値のある1年間を作ることができたと感じています。このプロジェクトに関わり、支えてくれた皆様に感謝の意を表します。

本年で5回目の開催となって本プログラムも、これまでの反省点を活かすことはもちろんのこと、常に新しいことに挑戦するという姿勢も大切になってきました。母団体であるISAの全国代表者をはじめ、会員みなさま、現地での活動を終始支え、共に働きかけてくれたLOOBスタッフ・キャンパーみなさま。私達日本人を温かく家庭へ受け入れてくださったホームステイ先のナナイ(Host-mother)、タタイ(Host-father)。現地の子どもたちの為に洋服集めに尽力してくださった団欒長屋の湊上様、私達の活動を熱心に聞いていただいた共立国際交流奨学財団の石塚様、私達の活動相談にのっていただき、協賛していただいたみなさま。これまでの事を成せたのはこのプロジェクトに関心を持ち、支えてくださったみなさまのおかげです。心から感謝申し上げます。ありがとうございます。この報告書を読んでいただき、今後とも国際協働プロジェクトにご関心を持っていただければ幸いです。

私達の活動は、社会や世界から見れば、ほんの小さな一歩に過ぎないかもしれませんが。国際協働を通し、現地の方々にきっかけを与え相互成長につなげる。思い描いているように事が運ばないこともあり、実際に行動することの難しさを痛感することが多かったように思います。しかし、日本とフィリピンでの活動によって、私達は貴重な仲間と経験を得ることができました。そして多くの方々の笑顔や感動の涙、感謝の言葉や叱咤激励は、私達に行動する意欲と新たな気づきや学びを与えてくれました。これらの人々との関わりは決して小さなものではなく、一つ一つの関わりがかけがえのない大切なものであると信じています。私達のこれらの経験をより多くの方々に伝え、社会へ還元できるようこれからも努めていきたいと考えています。

最後に、私と共に困難を乗り越え、活動を楽しみ支えてくれた頼もしい実行委員・スタッフのみんなに、心から感謝します。

2014年11月 第5回国際協働プロジェクト (ISAP05) 実行委員長 石井 志帆

1-2

実行目的

この国際協働プロジェクトは「世界平和達成への貢献」を理念に掲げ、その為に必要な活動を様々な御協力者と共に働きかけながら作り上げ、実行することを目的とした国際協力活動を行うものです。

国際学生協会（ISA）は 1934 年に発足した団体です。そして、第 2 次世界大戦という悲惨な体験によって、当協会は世界平和の重要性への認識を得ました。「世界平和達成への貢献」という理念に基づいて行われる私達の活動は、既に 80 年の時を経ています。その中で活動の一環として、私達は 60 回の国際学生会議を開催しています。この会議に参加した学生一人一人の心の中に「世界平和達成への貢献」という理念が確実に根付き、人類の相互理解への寄与は、大いに価値のあるものであると自負しています。しかしそれと同時に、私達は学生としての「行動」の重要性を痛感しています。60 回それぞれの会議の中で感じたことや考えたことを、行動により実社会に還元しなければならないのです。つまり、世界平和達成へのより大きな貢献の為に、議論の枠を越え、平和へ向けたより主体性を伴った行動が必要不可欠なのです。

今までに足りなかったこの「行動」を推進していく本プロジェクトにおいて、私達は次の実行目的を掲げることと致しました。

『自己の成長に伴う他者の成長への貢献』

「世界平和達成への貢献」という壮大な理念のもと、私達は全力で「学生に何ができるのか」という問いかけに立ち向かい、この問いかけに対して私達は成長を志向します。なぜなら、将来を担う私達学生が自らの手で課題を見つけ解決策を模索し実行に移していくことで得られる成長が、世界平和達成への大きな推進力になるということを ISA の長い歴史の中で実感してきたからです。本プロジェクトを実践していく中で、私達の活動に関わる全ての人々が、私達の活動から何らかのきっかけを得てさらに成長し、彼らからもらう刺激を糧に私達もさらに成長する。そうして相互成長を促進し影響の輪を広げていくことによって、世界平和達成への基礎を築いていくのです。私達学生は今すぐ社会的に大きな影響を与えることはできませんが、10 年後 20 年後を見据えた時、私達の活動が着実に社会の大きな財産となっていると信じます。

私達個人の成長が ISAP という組織の成長に繋がり、それが他者への成長に繋がる。そうして学生一人一人の小さな力が世界平和達成への大きなうねりとなることを切に願います。そのための第一歩を、私達は踏み出したのです。

第 2 章

第 5 回国際協働プロジェクト概要

第 5 回国際協働プロジェクト概要、協力団体

第 5 回国際協働プロジェクト日程

実行委員、スタッフ名簿

2-1

第5回国際協働プロジェクト概要、協力団体

構成	国内活動：「事前勉強会」、「交流会」、「国外活動報告会」 国外活動：「フィールドワーク活動」、「協働活動」
実行日	国内活動：2013年2月～2014年12月 国外活動：2014年9月6日～17日
場所	国外活動：フィリピン共和国パナイ島南部イロイロ州イロイロ市
ねらい	協働を通じた実践により自他共に成長し、広い視野をもつこと
参加人数	19人
協力団体	NGO LOOB 団欒長屋（学童） 大阪教育大学 MERRY 立命館大学 Ricoppine

2-2

第5回国際協働プロジェクト日程

DATE	ACTIVITY	LOCAION
9月6日	日本出国 マニラ経由イロイロ着 ペンション着	
9月7日	アメージングツアー オープニングセレモニー ナバイス村散策 ホームステイ	Iloilo city LOOB BASE
9月8日	Dumpsite tour ワークショップ ホームステイ	カラフナン ダンプサイト LOOB BASE
9月9日	食育活動 歯磨き活動 手洗い活動 School Activity ホームステイ	ナバイス小学校 ナバイス小学校 ナバイス小学校 ナバイス小学校
9月10日	Work Activity Sit in class 食育活動 歯磨き活動 手洗い活動 School Activity ホームステイ	ナバイス小学校 ナバイス小学校 ナバイス小学校 ナバイス小学校 ナバイス小学校 ナバイス小学校
9月11日	Work Activity 食育活動 歯磨き活動 手洗い活動 School Activity ホームステイ	ナバイス小学校 FJK 小学校 FJK 小学校 FJK 小学校 FJK 小学校
9月12日	Work Activity ホームステイ	ナバイス小学校

9 月 13 日	Weekend Kids Activity ホームステイ	ナバイス小学校
9 月 14 日	Sunday homestay フレンドシップナイト ホームステイ	ナバイス小学校
9 月 15 日	Interaction with college student ホームステイ	
9 月 16 日	クロージングセレモニー ショッピング LOOB share house 着	ナバイス小学校 SM モール
9 月 17 日	イロイロ発 マニラ経由日本帰国	

2-3

実行委員、スタッフ名簿

<実行委員一覧>

※注 ISAP04：第4回国際協働プロジェクトの略称

役職	名前	大学・学年	備考
実行委員長	石井 志帆	関西学院大学 3年	ISAP04 財務
総務	笹原 望未	同志社女子大学 2年	ISAP04 運営スタッフ
財務	細川 知奈美	関西学院大学 3年	ISAP04 運営スタッフ
広報	橋本 望	岡山大学 2年	ISAP04 運営スタッフ
企画リーダー 食育	加地 浩幸	同志社大学 3年	
衛生	貴島 将司	甲南大学 2年	
英語	金行 彩那	関西学院大学 2年	
交流	井口 実穂	京都ノートルダム女子大学 3年	ISAP04 運営スタッフ

<運営スタッフ一覧>

名前	学校・学年
神夏磯 晴香	神戸松蔭女子学院大学 4年
松嶋 秀太	甲南大学 4年
飼谷 真理	甲南大学 3年
濱田 彩香	関西大学 3年
垣見 遥	ノートルダム清心女子大学 2年
空閑 真凜	甲南大学 2年
久西 結菜	甲南大学 2年
田路 美奈帆	関西学院大学 2年
枝元 優奈	神戸松蔭女子学院大学 1年
小林 春暁	同志社大学 1年
田中 沙季	神戸松蔭女子学院大学 1年

第 3 章

プロジェクト報告

国内活動概要

事前勉強会

交流会

国外活動報告会

国外活動概要

フィールドワーク総括

Dumpsite tour、Sit in class

協働活動総括

Weekend Kids Activity、食育活動、歯磨き活動、手洗い活動、
オープニングセレモニー、フレンドシップナイト、School Activity、
Workshop、Interaction with college student

3-1

国内活動概要

期間： 2013 年 12 月～2014 年 12 月

場所： 関西学院大学、甲南大学、団欒長屋

対象： 団欒長屋（学童）の子供たち
大阪教育大学 MERRY
立命館大学 Ricoppine
ISAP 実行委員・スタッフ

目的： 日本とフィリピンの子どもたちを繋げること
他団体のメンバーと意見を交わし自分の価値観や世界を広げること

構成： 「事前勉強会」、「交流会」、「国外活動報告会」

1.事前勉強会

国外活動の充実を図るための ISAP 実行委員・スタッフを対象とした事前勉強

2.交流会

学童においては、日本の子供たちにフィリピンについて知ってもらうための交流

他団体との交流では、参加者個々の成長を図り、ひいては両団体の今後の活動をより活性化するためのディスカッションとワークショップ

3.国外活動報告会

国外活動での経験を来場者に伝えることで、来場者への国際協力・国際協働のきっかけ作り

3-1-1

事前勉強会

文責：笹原 望未

1. 活動の目的・目標

実際にフィリピンで国際協働する前に、フィリピンや国際協働・国際協力、提携団体についての知識をつけ、理解すること。現地のことを、現地の人の現状や心境を知らない限りは本当の国際協働ができないため実施した。

2. 活動内容

<目的確認>

それぞれが考える活動目的の認識がずれていると、団体としての方向性や目的が不安定になってしまうため、全員の認識を一致させるために行った。

目的：協働を通じた実践により自他共に成長し、広い視野をもつこと。

ISAPにおける協働とは、ISAPに関わる人たちと共に企画を作り上げていくこと。

また、その過程で刺激を受け成長し、その成長が他者の成長につながるような相互成長を目的としている。

実践とは、食育、衛生、英語、交流企画のことを指す。

<英語を使ったゲーム>

フィリピンでは英語を使ってコミュニケーションを取らなければいけないため、英語を使う練習をする場を設けた。また、英語への苦手意識を払拭するため英語を使って楽しめるゲームも行った。

例：自分の好きな本について英語で説明するゲーム

ある単語について英語で説明するゲーム

<フィリピンについての勉強会>

実際フィリピンに行く前にフィリピンについて理解を深めるために行った。フィリピンの言語、気候、国民性などについて、各自が割り当てられたテーマについて調べ、全員の前でプレゼンテーションをした。

テーマ：基本情報（人口、気候、位置など）、スモークーマウンテン、食育、衛生、ヒリ
ガイノン（現地語）

3. 反省・改善点

<目的確認>

やはりそれぞれが考える目的は異なり、ひとつの意見に一致させるのは難しかったが、それぞれが原点に戻り、根幹について考える良い機会になった。しかし、活動中にこの目的を思い浮かべながら行動できなかったこともあり、目的を更に強く認識しておく必要がある。

<英語を使ったゲーム>

英語のレベルがそれぞれ異なったので、ゲーム内容が簡単になりすぎたこともあり、実際国内活動で行ったゲームが国外活動のコミュニケーションの糧となったかは疑問であるが、普段、英語を話す機会がほとんどない私たちにとっては少なからず英語に慣れることができた。

<フィリピンについての勉強会>

各テーマについて各自インターネットや本などで調べ、わかりやすいプレゼンテーションでフィリピンについて伝えることができていた。また、プレゼンテーションを聞いて必死にメモを取る様子も見えて、自分たちが行く国について知見を広げようとする姿勢が積極的に見られた。しかし実際フィリピンに行ったことがない人はインターネットなどの信用性に欠ける情報源のみに頼らざるを得なかったことが悔やまれる。



3-1-2

交流会

文責：笹原 望未

1. 活動の目的・目標

日本とフィリピンの子どもたちを繋げるために学童さんを訪れた。子供たちにフィリピンについて興味を持ってもらうため、フィリピンの生活や文化について説明し、子どもたちが書いた質問をフィリピンに届け、その答えを国外活動後に日本の子どもたちに伝えた。

また、他団体のメンバーと意見を交わし自分の価値観や世界を広げるために交流会を行った。参加者個々の成長を図り、ひいては両団体の今後の活動をより活性化するためのディスカッションとワークショップを実施した。

2. 活動内容

＜大阪教育大学 MERRY との交流会＞

日時： 2014 年 5 月 24 日（土）

場所： 関西学院大学 梅田キャンパス

対象： 大阪教育大学 MERRY、ISAP 実行委員

内容： お互いの活動紹介を行った後、「ドロップアウト（中退）をなくするためにはどのようなプロセスで問題に取り組むとよいか。私たちにできることは何か。」「ドロップアウトをしてしまった子どもたちにはどのようなサポートをしていくとよいのだろうか。」という 2 つのテーマでディスカッションを行った。



＜立命館大学 Ricoppine との交流会＞

日時： 2014 年 6 月 21 日（土）

場所： 立命館大学 衣笠キャンパス

対象： 立命館大学 Ricoppine、ISAP 実行委員・スタッフ

内容： お互いの活動紹介を行った後、フィリピンの小学生に向けて企画を実施するという設定で、企画の内容をさまざまな視点から考えるというワークショップを行った。



＜団欒長屋との交流会＞

日時： 2014 年 8 月 16 日（土）

2014 年 10 月 25 日（土）

場所： 団欒長屋

対象： 団欒長屋の子供たち

内容： 日本の子供たちにフィリピンについて知ってもらうためフィリピンの生活や文化について説明した。また、子どもたちが書いた質問をフィリピンに届け、その答えを国外活動後に日本の子どもたちに伝えた。

3. 反省・改善点

＜大阪教育大学 MERRY との交流会＞

ディスカッションテーマを ISAP と MERRY に共通するものにしようと思い、上記のテーマを選んだが、テーマの目的、対象などが不明確で困惑させてしまった。また、ISAP も MERRY も「問題解決」を目的とした団体ではないのに、テーマを「問題解決」目的にしてしまった。しかし、お互いの活動を知り、お互いに足りてない部分に気づくことができた。

＜立命館大学 Ricoppine との交流会＞

Ricoppine の活動を知ること、今まで自分たちの中になかった意見や発想を知ることができたと同時に、自分たちの活動も再認識できて、とても有意義な時間になった。団体紹介のときに真剣にメモをとる姿勢があり良かった。交流会では、主にワークショップに焦点を当てたのだが、今後もう少し踏み込んだ内容に挑戦し、更なる活性化を図ることができるのではないかと感じた。

＜団欒長屋との交流会＞

交流会では、パワーポイントを用いてフィリピンについて子供たちに説明したのだが、エネルギッシュな子供たちにとっては退屈だったようなので、どのようにしたら子供たちに興味を持ってもらえるかなど説明の仕方を今後工夫できるのではないかと感じた。また、企画の趣旨を把握するには年齢が低すぎたようにも感じる。

3-1-3

国外活動報告会

文責：笹原 望未

1.活動概要

活動目的： フィリピンの現実を知ってもらい、ISAP がなぜ、どんな活動を行ったのか、そして、何を感じたかをより多くの人に伝えるため。

日 時： 2014 年 11 月 8 日（土） 14：30～17：30

場 所： 京都市中京青少年活動センター 和室

内 容： まず初めに ISAP と LOOB の概要を説明した後、各企画担当者が活動報告のプレゼンテーションを行った。各企画を行う背景、目的などを示した後、実際企画が行われた様子や、良かった点、悪かった点、改善点を示した。企画の活動報告以外にも、スモーマウンテンを訪れた際にウエストピッカーの方に質問した内容や感想、更にフィリピンで過ごして感じたことや街の様子、生活、食事、文化なども写真を交えて発表した。その後は座談会・意見交換会として来場していただいた方々と自由にお話させていただく時間を設け、フィリピンについて、私たちの活動について、国際協働についてより詳しくお伝えすることができたと同時に、来場者から、今後の活動の参考になる貴重な意見もたくさんいただいた。

2. 活動を終えて

私達がこの 1 年間で経験したこと、考えてきたことを自分たちだけで消化するだけでなく、外部の方々に発信することができ、非常に有意義な報告会になったのではないと思う。また、外部の人達にフィリピンの現状や、ISAP の働きかけを知ってもらうと同時に、私達も ISAP の活動について考え直し指針を確認することができた。



3-2

国外活動概要

期間： 2014 年 9 月 6 日～17 日

場所： フィリピン共和国パナイ島南部イロイロ州イロイロ市

対象： ナバイスに住む人々

目的： 協働を通じた実践により自他共に成長し、 広い視野をもつこと

構成： 「フィールドワーク活動」、「協働活動」

1.フィールドワーク活動

2.協働活動

協力団体： NGO LOOB

3-2-1

フィールドワーク総括

文責：細川 知奈美

1. 活動内容

・ Dumpsite Tour

初めに LOOB スタッフの方からカラフナンのゴミ山の歴史やイロイロ市のゴミの排出量などについて教えていただき、その後実際にスモーキーマウンテンを訪れました。それからゴミを拾って生計を立てているウエストピッカーの家族の家に訪問し、質問をさせていただきました。

・ Sit in class(授業見学)

フィリピンの小学校ではどのような授業が、どのような方法で行われているのかを見せていただきました。3年生～6年生の授業を見学することができました。

2. 個人感想

まず **Dumpsite Tour** では日本にいと絶対にできない貴重な体験をさせていただきました。ゴミ山は想像していたよりもはるかに大きく、臭いもきつかったです。そして実際にここで働く家族へのインタビューはとても印象的でした。お金がなくても子供を一番に考える気持ちというのはどこの国においても共通なのだと実感することができました。このフィールドワークではフィリピンの課題とまた日本における課題についても考えることができました。ここで感じたことを忘れずに、たくさんの人にこの経験を伝えていきたいと考えています。

Sit in class ではフィリピンの子供たちの元気よさを改めて感じました。一つの問題に対してクラスの大多数が手を挙げとても積極的に参加していたのが印象的です。ここでは先生がどういった工夫をこらして子供たちの注意をひき、授業をうまく進めているのかを学ぶことで自分たちの小学校でのレクチャーにいかすことができました。ここで学んだことを来年の ISAP06 の活動につなげていきたいです。

Dumpsite Tour

文責：貴島 将司

1. 活動目的、目標

- ・目的 フィリピンで社会問題となっているスモークーマウンテンと言われるゴミ山を訪れ、現状を知り、そこでの複雑な問題知ることを目的としました。

- ・目標

実際にスモークーマウンテンとウエストピッカーの家庭を訪れ、その現状を肌で感じ、現地の人がこの場所をどう認識しているのかを知り、日本人の認識との違いを知ることが目標としました。

2. 活動内容詳細

日程 2014 年 9 月 8 日(月)

活動場所 イロイロ市カラフナンにあるスモークーマウンテン

日本での活動として、スモークーマウンテンについてリサーチをして、知識を身に付けました。

現地では、実際にスモークーマウンテンを訪れ、そこでの現状を知りました。またウエストピッカーの家庭を訪問させて頂き、彼らの生活面や価値観など多くのことをお話ししました。

3. 企画の反省・改善点

ウエストピッカーの家庭訪問は時間が限られていたので、質問したいこと聞きたいことを事前にまとめておけば、より有意義な時間にすることができたのではないかと思います。また、全体的に言えることですが、受け答えする人も一部の人に偏ってしまっていたので、現地の人と話そうという気持ちをもっと持って取り組む必要があったと感じました。

4. 総括

スモークーマウンテンを訪れ、私たちは現状を実際に目の当たりにし、様々なことを考えました。

私がここに訪れるまでに考えていたスモークーマウンテンは実物とは遠くかけ離れており、

あんなにも規模が大きいものだとは思いませんでした。実際ここを訪れると、子どもたちはサンダルでガラスや得体のしれないものがたくさんあるゴミ山を歩いていたり、そこを流れる川で遊んでいたりと日本では考えられないことが多くありました。それでもウエストピッカーとして暮らしているファミリーの方々は幸せに暮らしていました。ゴミ山を処理する必要がある、でもここを拠点にゴミを集めてお金を換金して生活をしているウエストピッカーと呼ばれる人たちがいるというジレンマは本当に難しい問題です。このスモークーマウンテンがフィリピンの各地に多くあるという現実は忘れてはいけないと思います。ここで暮らしている人々がより安全な環境で暮らせるようになることを願っています。この活動に協力していただいた皆様本当にありがとうございました。



Sit-in class (授業見学)

文責：細川 知奈美

1. 活動の目的・目標

実際にフィリピンの小学生の授業を見学し、日本の教育方法、教育環境の違いを知るとともに、先生たちの授業への工夫を学び自分たちの小学校でのレクチャーにつなげるということを目的に行われました。

2. 活動内容

- ・ 日時：9月10日（水）
- ・ 場所：ナバイス小学校
- ・ 概要：4クラスに分かれて、3～6年生の授業を見学させていただきました。時間は30分ほどです。

3. 活動詳細

まず、4グループに分かれて教室に入り、教室の後ろで椅子に座って見学させていただきました。私のクラスは4年生の教室で、生徒の人数は約40人でした。私が見学したのは理科の授業で、植物のつくりについて勉強をしていました。印象的だったのは、現地語ではなく英語で理科の勉強をしていたことです。日本の子供は基本的に日本語しか喋れないけれど、フィリピンの子供は英語も現地語も喋ることができます。こういった普段の授業から英語を使って学ぶことで、子供たちの英語能力は高くなっているのだと感じました。授業の進め方としては初めに先生が説明し、その後説明した内容についてクイズをし、最後にノートにとるといったものでした。クイズではクラスの大多数の生徒が手を上げて、積極的に授業に参加していました。恥ずかしがって手をあげないといったことはなく、間違っているけどみんな間違いを恐れず答えていたのが印象的です。そして最後に学んだことをノートにとり、それを一人ずつ先生に提出して授業は終わりました。日本だと基本的に一番初めにノートを取るのが主流なので、こういった所も教育方法の相違点であると感じました。机の並び方などはあまり整頓されておらずすぐ隣には友達がいるといった状況であったので、中にはお喋りをしてあまり授業を聞いていない子供も見受けられました。またノートは一冊というよりは、一枚の紙に書いていくという感じであったため、すぐになくなってしまいそうでした。また授業中に教科書といったものはありませんでした。先生は授業中大きな声でゆっくりと何度も単語を発音して、子供たちが理解しやすいように心がけていました。

4. 反省点・改善点

特に準備をしていなかったため、ただ見ているだけになってしまったところがありました。事前にどういったことを知りたいのかを考えていくことで、もう少し有意義な時間になることができたと思います。また授業を見たままになってしまい、共有する時間が取れなかった所も反省点です。4クラスあったため、それぞれのクラスがどんな様子であったのかを共有することで、知識を増やすことができ、また自分が気づいていなかった点も知ることができたと思います。



3-2-3

協働活動総括

文責：貴島 将司

私たちは当プロジェクトを行うにあたって世界平和達成への貢献というビジョンを掲げました。そして、このビジョンを達成するために、「協働を通じた実践により自他共に成長し、広い視野をもつこと」という一年間の目標をもとにして、私たちはこの五回目になるプロジェクトで協働という言葉を実に頭にに入れて活動してきました。では協働とは何か？という問いに活動が始まった当初から議論が飛び交いました。そして、これまでの活動内容や当プロジェクトの目的などを踏まえ、実行委員で話し合った結果として「ISAPに関わる人たちと共に企画を作り上げていくこと、また、その過程で刺激を受け成長し、その成長が他者の成長につながるような結果としての相互成長」という協働の方針のもと活動を行ってきました。

この方針のもと、食育、衛生、英語、交流の四つの企画作りに励みました。まずは現地の状況を知るためのリサーチから始め、下見での訪問時に現地でのニーズを尋ね、インターネットで連絡を取りあいながらプロジェクトメンバーで話し合い、試行錯誤しながら相手の視点に立って自分たちの実行したい企画を考えました。この企画作りは時間の要する困難な作業ではありましたが、現地ではある程度の企画内容は固められていたため、LOOB スタッフ、フィリピンキャンパーのご協力のもと企画の改善に努め、柔軟に対応し、企画を行うことができました。企画を行っているときには、現地語への翻訳や、現地ならではのアイスブレイク、注意の促しなどの現地スタッフの手助けをしていただきました。

これらの四つ企画と OC,FN,ワークでの協働活動は長期的にはと言えないが、ニーズに答えることができ、それだけでなく現地の人との繋がりを大きくし、何よりも得たものは本当に多くあり、各々の成長に確実に繋がったのではないかと考えています。

またこれらの活動で知ったこと、得たものを日本でも発信していきたいと思っています。当プロジェクトの共同活動に関わって頂いた、たくさんの方々に深く感謝します。

Weekend Kids Activity

文責：金行 彩那

1. 活動目的・目標

Weekend Kids Activity の活動目的・目標は 3 つあります。1 つ目は、子どもたちに英語に興味を持ってもらい、英語を使うことの楽しさを知ってもらうことです。2 つ目は子どもたちに日本の文化を知ってもらうことです。そして 3 つ目は、英語を通じて私たちと子どもたちが交流を深めることです。

2. 活動行程

9 月 13 日の午前中にアイスブレイク・メインテーマ・ゲーム・食育と衛生のレクチャーの 4 つのグループに分かれて準備を行いました。その後、流れを確認するために一度リハーサルを行いました。当初の予定では Buri というカラフナンのゴミ山の近くの村で行う予定でしたが、この日は一日雨だったためナバイス小学校に変更になりました。14 時から 16 時の 2 時間を使って活動を行いました。

3. 活動場所

ナバイス小学校

4. 活動内容詳細

・アイスブレイク「Head Shoulder Knees And Toes」

「Head Shoulder Knees And Toes」の歌で体を使いながら遊びました。「Head Shoulder Knees And Toes」と順番にみんなで声を合わせながら言っていき、前に立っている人が、例えば「Knees」と言ったら膝を押さえるというゲームです。違う箇所を押さえた人は負けになり、最後まで残った人の勝ちになります。

・メインテーマ「ぶんぶんゴマ」

まず初めに日本の伝統的なおもちゃであるコマや、おせち料理や福笑いについて子どもたちに紹介しました。福笑いでは 1 人の子どもに前に出てきてもらい、実際に体験してもらいました。日本の文化について知ってもらった後、ぶんぶんゴマを作成しました。あらかじめ糸を通して用意していたぶんぶんゴマを子どもたちに自由にシールや絵を書いてもらって一緒に回して遊びました。最初は 5 つのグループに分かれ、ぶんぶんゴマを作成し、最後にみんなで 1 つの輪になってぶんぶんゴマを一緒に回しました。

・単語ゲーム

3つのグループに分かれ、カードに書かれてある現地語を英語に直して答えてもらいました。先頭の人からどんどん答えていき、1番早く最後の人言い終わったチームの勝ちというグループ対抗で単語ゲームを行いました。勝ったチームにはシールをプレゼントしました。また、この単語ゲームでは ISAP04 で使用した三か国語カードを使ってゲームを行いました。

・食育・衛生のレクチャー

食育のレクチャーでは、栄養素に関する紙芝居とクイズを行いました・衛生のレクチャーでは手洗いのポーズを子どもたちと一緒に確認しました。

5. 企画の反省点・改善点

①英語を使う時間が少なかったことです。当初の予定ではもう一つ英語のゲームを行う予定でした。さらに他に2つゲームを国内の準備段階で用意をしていましたが、実際現地に行くと構成がすでに決められており、英語を使ったゲームが1つしか行えませんでした。そのため英語を使うことがこの企画の目的の1つでしたが、英語を使う時間が少なかったと思います。**Weekend Kids Activity**の目的は英語を使うことであるため、もう少し英語を使う時間を増やすべきだと感じました。

②ぶんぶんゴマを回せていない子どもたちがいたことです。メインテーマであったぶんぶんゴマでは、回せていた子どもたちは楽しそうにしていたましたが、回し方がよく分かっていない子どもたちもいました。私たちがもっと事前に回し方を理解しておくべきだったと感じました。また私たちが作っていたぶんぶんゴマ自体が不良品で回せないということもあったので、事前に点検をもっとするべきだったと感じました。

③子どもたちの集中を向けるのが難しかったことです。単語ゲームでは3つのグループに分かれて1列に並んでもらいましたが、子どもたちがとても元気で騒がしく、ゲームを始めるまでに時間がかかってしまいました。また最後のレクチャーも、子どもたちの集中力が切れてしまい。きちんと話を聞いてくれない子どもたちも多かったです。さらに、当日は雨だったため大きな声を出さないと子どもたちも聞き取りにくかったため、余計難しかったです。子どもたちの注意を向けるのは難しいことですが、騒がしい子どもたちや、話を聞いていない子どもたちがいたら、積極的に私たち

が声掛けをするなど事前に対処法を話し合っておく必要があるなと感じました。

④子どもたちの英語レベルが様々であるため、単語ゲームが難しいと感じる子どももいたことです。1つのゲームでもレベルを分けるなどして、現地に行ったときに臨機応変に対応できるように、様々なレベルのゲームを用意しておくの良いなと感じました。

6. 総括

ゲームを1つしか行うことが出来ず、英語を使う時間をもう少し取ることができたらなと感じましたが、子どもたちは楽しめていたのではないかなと思います。特にぶんぶんゴマでは、みんなそれぞれシールやペンでデコレーションをして回すのを楽しんでいたように思います。また、私たちもこの活動を通して子どもたちとたくさん交流ができ、距離を縮めることができたのではないかと思います。**Weekend Kids Activity**では何人の子どもたちが参加するのか、どのくらいの学年の子どもたちが参加するのかが直前まで分からないため、あらゆる状況を想定し、柔軟に対応することが必要であると今回感じました。



食育

文責：加地 浩幸

1.活動目的

食育企画を通してフィリピンの将来を担う子供たちが、食生活に関する現状を認識し、少しでも悪いところを良い方向に改善するように私たちが力になり、Betterな方向へのきっかけを作ることです。あくまでも問題解決を目的としておらず、食生活を考え直すインセンティブを与えることです。

2.目標

短期的目標として、子供たちが食生活に関する正確な知識を学びどこで、どのように、なぜなのかなどを理解することです。さらに、長期的視点から今後の人生を生きていく上でそれらを活かしてもらうことです。

3.活動内容

活動概要

活動行程： 9月10日、午前

9月11日、午前

9月12日、午前

活動場所：NAVAIS 小学校、FJK 小学校

内容要約・栄養素レクチャー（15分）

- ・砂糖に関するレクチャー（15分）

- ・噛むことの大切さレクチャー（15分）

詳細

① NAVAIS 小学校の一日目について

一日目は私たち4つの班がそれぞれ3年生から6年生に分かれて、栄養素、砂糖噛むことの大切さのレクチャーの順で、15分ずつ行いました。

栄養素企画では、子供たちに初めに、「好きな食べ物は何か？」発問から開始し、多くの子供たちが「チキン」と答えていました。次に、栄養素の表を用いながらどの栄養素がどのような働きが私たちの体で起こっているのか、またどの食材がそれを担っているのかを説明をしました。さらに、食材を擬人化した劇を通して子供も楽しく栄養素に関して復習ができました。

砂糖に関する企画では、初めに人の感情や動作を表した絵を子供たちに見せ、「この人はどのように見える？」など質問をしました。そこから、子供たちの答えと私たちの意図が重なった具合に、「砂糖を多くとればとるほど、様々な感情、行動に悪影響を及ぼす表」を子供たちに示しました。次に、500mlのコーラの写真を見せ、

これがどのくらい砂糖が含まれているのか発問をしながら、理解をしてもらいました。さらに、小学生が一日に取るべき適正な砂糖の量も発問をしながら、理解をしてもらいました。工夫した点は、実際に500mlに含まれる砂糖の量をジッパーにいれ、子供たちに示しさらに、適正量も同様に子供たちに示し、比較をしつつ、視覚的に子供たちに理解させることができたことです。最後に砂糖を取り過ぎない方法として、栄養素企画を活かしお菓子を間食しないために、朝、昼、晩にしっかりと栄養素を基にバランスの良い食事をすることや実際のペットボトルの水を示しながら喉が渴いたからと言ってジュースを飲むのではなく、砂糖が混じっていない飲料水を飲む2点を明示しました。

噛む企画については、初めに食べ物を十分に噛むことでよく噛むことで脳が刺激され、発達し賢くなる噛むこと、全身に力がみなぎること、肥満防止につながる3点をツールを使いながら説明し、子供たちに復唱させながら進めました。次に、良く噛まなかった場合におこる問題と十分に噛んだ時に起こる良いこととして、消化不良によって胃が痛くなるなど、食べ物の吸収が良くなるなどを説明し、理解してもらいました。

② NAVAIS 小学校の2日目について

2日目は当初の計画が変更され、私たちの4つの班は学年が異なった栄養失調の疑いのある子供たちが4つのクラスに分けられた。初めてこれらのレクチャーを受ける子供たちもいるので、一日目にしたレクチャーの復習を兼ねつつ行った。

栄養素企画では、昨日の復習も兼ねて栄養素の表を用いながらどの栄養素がどのような働きが私たちの体で起こっているのか、またどの食材がそれを担っているのか改めて説明をしました。次に、クイズを行った。子供たちの参加意欲を駆り立てるために、用意したシールなどをクイズの正解者に与えるように工夫をした。

砂糖企画では初めに一日目に行った事項の確認を兼ね復唱しながら復習を行いました。次に、子供たちに砂糖を取り過ぎた子供と日々気を付けて摂取をした子供がどのような大人に成長したのかというストーリーを描いた紙芝居を行いました。さらに、改めて最後に砂糖を取り過ぎない方法として、栄養素企画を活かしお菓子を間食しないために、朝、昼、晩にしっかりと栄養素を基にバランスの良い食事をすることや実際のペットボトルの水を示しながら喉が渴いたからと言ってジュースを飲むのではなく、砂糖が混じっていない飲料水を飲む2点を明示し、強調しました。

噛む大切さについては、最初に食べ物を十分に噛むことでよく噛むことで脳が刺激され、発達し賢くなる噛むこと、全身に力がみなぎること、肥満防止につながる3点を復唱しながら確認しました。次に、柔らかいスルメを用いて実際に30回以上噛むことを目標とし、噛むことの重要性を理解してもらうために実践をしました。

③ FJK 小学校

当初の計画では2日間こちらの小学校に訪問する予定であったが、一日のみの訪問と変更になり、NAVAIS 小学校の2日目のように私たちの4つの班は学年が異なった栄養失調の疑いのある子供たちが4つのクラスに分けられました。

栄養素企画に関しては、初めに子供たちに発問をし、栄養素がどのような働きが私たちの体で起こっているのか、またどの食材がそれを担っているのか説明をしました。次に班によってクイズか劇のどちらかを選択し行いました。班それぞれ臨機応変に選びました。クイズに正解者には忘れず、ご褒美にシールも与えました。

砂糖企画については、NAVAIS 小学校の1日目とほぼ同様です。

噛む企画については NAVAIS 小学校の2日目とほぼ同様です。

4.反省

短期的目標は概ね達成できたと考えています。理由の具体例としては、レクチャーを受けるまで **Go, Grow, Grow¹**は知っていても、それがなぜ大事なのかどのような働きをするのか子供たちは知らず、理解していませんでした。しかし、レクチャーによってそれができるようになりました。さらに、レクチャーの何日か後に子供にクイズを出してみると、しっかりと答えることができていたからです。

しかし、子供たち全員が理解できたかというところとは言い切れません。その主な理由として子供たちの学年、年齢の問題が挙げることができるでしょう。NAVAIS 小学校一日目は最低学年が3年生でした。私たちのレクチャーは最低学年が3年生と仮定して完成させました。残念ながら、NAVAIS 小学校2日目と FJK 小学校の最低学年は1年生でした。日本の幼稚園に通うような子供たちが理解するには難しい内容であったことは否めません。もちろん、私たちも可能な限り理解の容易な単語、センテンスを用いましたが工夫が足りなかった点や私たちの考えていた以上の学年によって理解できる範囲のギャップがありました。さらに、英語の授業もまだ始まっておらず、英語では理解が全くできないことも原因であったと思います。しかし、現地語を話せる LOOB スタッフが何度も説明しても理解できない子供もいたので、やはり私たちのレクチャー内容が難しいと考えることが妥当でしょう。

加えて、NAVAIS 小学校の子供たちに比べて FJK 小学校の子供たちは落ち着きがない子供たちが多く、注意しても聞いていない子供もいたからです。私たちのレクチャーに興味をあまり持てなかったのかもしれない。

長期的目標に関しては今すぐに結果が分かるわけではありません。私たちが日本に去って1年、2年、10年と月日が流れる中で、ふとこれらのレクチャーを思い出してくれれば、成功ですし、幸いです。今後も引き続き活動を継続するであろう ISAP の後輩たちにもこの成功は掛かっていますし、繋がっています。更なる ISAP 活動の活性化の実りを祈りたいと思います。

¹ それぞれ栄養素の赤、黄、緑である。

5. 改善点

一点目として、企画を学年で分けて作ることが挙げられます。それによってスタッフの負担は増えますが、今回を通して子供たち全員に理解してもらう企画を創るためには仕方のないことかと思います。例えば一年生、二年生、加えて三年生向けの食育企画と四年生から六年生向けの食育企画を創るなどの工夫があります。これによって負担も多少軽減できると考えられます。しかし、今年度のように4つの教室で一斉にレクチャーをすることを過程すると、異なる学年に向けての食育企画（一年生、二年生、加えて三年生向けと四年生から六年生向け）の2つ×4班で8つのツール+2つの企画を考案するには、日本での十分な準備時間を確保する必要が必須条件です。特にツール作成の時間の工夫が必要です。もし、事前にどの学年にいくつの班に分かれてレクチャーをするのか分かりさえすれば、これらの労力はかなり軽減され、現実味を帯びると思うので、緊密な情報の交換をLOOBとすることです。それでも、実際現地での変更は高確率で起きると思うので、ある程度何が起きても対応できるように準備を怠らないようにすることです。

二点目は今年度のように企画を3つにするのではなく、2つに絞る考えも大事でしょう。実際の現地のレクチャーでは、時間に追われながらレクチャーを進行していたので、とても慌ただしく、時間を気にし過ぎ子供たちの反応を見る余裕も持てなかった班もあるからです。これを行えば、日本でのツール作りの負担も減り、改善点一の実現性も高まると考えられます。大事なことは時間を気にしながらレクチャーをするのではなく、「子供たち」のためにすることです。しっかりと時間的に余裕を持って、子供たちのための企画を創るためには、改めて考えるべきでしょう。

三点目として子供たちの興味をより駆り立てる内容にする必要があります。発表中も英語のセンテンスが載った台本を見るのではなく、暗記することが最低条件です。暗記をしておけば子供たちの表情を読み取る余裕が生まれ、子供たちも企画にさらに集中して聞いてくれることは間違いありません。この原因として、暗記をするまでの準備時間が日本で確保できなかったことです。ISAP全体の反省としても通じるでしょう。来年度は必ず改善をするために、暗記テストをスカイプを利用して行いチェックするなどの工夫をしましょう。

四点目は私たちがもう少し教室の秩序の統制を取る必要性があります。聞いている子供たちに邪魔になるような行動をしている子供たちもいたからです。それは、しっかりと聞く環境を作るためです。教師と生徒の関係のように、もっと厳格な態度が私たちに必要でしょう。また、教室の担当の先生方が今回は同席していなかったのも、彼らに同席してもらい、協力をして頂く工夫をしても良いかもしれません。信頼関係を築けていない状態でレクチャーをするため、仕方のないことなのかもしれません。しかし、まずは私たち自

身がより子供たちがレクチャーに集中するようになるために、統制を取れる態度を示すことでしよう。



歯磨き活動

文責：貴島 将司

1.活動目的・目標

私たちが活動をする場となる地域では歯磨きの習慣があまり身に付いておらず、虫歯となり、歯が溶けてしまっているというような現状があります。またフィリピンの至る所でサリスリストアと呼ばれるお菓子屋さんが多くあり、小学校にも設置されているほどで子どもたちが容易にお菓子を購入できるというような背景もあります。

そこで私たちは日常的に歯磨きをすることの大切さを子供たちに楽しんでしっかりと理解してもらい、歯磨きの意識づけを促すということを目的としてレクチャーと歯磨きの実習の活動に取り組みました。

2.活動内容

日程：2014年9月9日、9月10日 9月11日

活動場所：ナバイス小学校（9/9、9/10）

FJK 小学校（9/11）

詳細

昼食前の授業時間を活用させて頂き、日本で用意していったツールを利用して歯磨きのレクチャーを実施しました。

内容

- ① 視覚的に理解してもらうためのきれいな歯と虫歯のある歯の写真の比較などを行いました。
- ② 歯磨きについての歌を一緒に歌いました。

Brush Your Teeth 歌詞

Brush Your Teeth Brush Your Teeth Give them all a treat

Brush UP DOWN and all AROUND to keep them clean and neat

In the MORNING and at NIGHT Clean them TWICE A DAY

Brush UP DOWN and all AROUND Keep feelings well away.(繰り返し・・・)

- ③ 用意したツールを用いて、ホワイトボードシートを使って水性ペンで書かれた歯の汚れている部分を磨いてもらうというものを参加型で行いました。
- ④ 昼食後にカラーテスターと言われる歯垢染色剤を用いて、汚れを確認しながらみんなで実際に歯磨きをしました。

*各企画の間にアイスブレイクを挟みました。

3.反省・改善点

- ・レクチャーの合間のツールの準備に少し時間がかかり、子供たちの集中が途切れることがあったので、前もって準備しておくべきでした。
- ・呼びかけをしていたが、それでもカラーテスターで服が汚れたり、校庭や教室の汚れが少し目立っていたので、カラーテスターの使用時には場所を考える必要があると感じました。

4.総括 この活動は第一回国際協働プロジェクトから現在まで継続して行われてきています。日本国内で歯ブラシの寄付をお願いするなど多くの人の協力のもと実施することができた企画です。現地では子供たちが興味深く、レクチャーを聞いてくれていたことがすごく印象的です。目標は達成できたのか。と聞かれると、すごく長期的なものとなるので達成できたと言い切ることはできません。しかしこのレクチャー中、子供たちが楽しみながら取り組んでいる姿から、子供たちが歯の大切さを理解してくれたのではないかと感じました。この活動がこの先、子供たちの心に残ってくれていれば幸いです。

この活動に協力していただいた、FJK(小学校)、ナバイス小学校の方々、LOOBの方々、この企画に関わって頂いた皆様ありがとうございました。



手洗い活動

文責：貴島 将司

1.活動目的・目標

私たちが活動する地域では手洗いをする習慣があまりなく、腹痛や感染症のような病気にかかることが多くあります。しかし、この事実をしっかり理解できていないという現実があります。

そこで私たちは手洗いを何故するのか、いつするのかなどを子供たちに理解してもらうという目的でこの活動を始めました。

そして子供たちに楽しみながら手洗いの重要性を理解してもらうことを目標としました。

2.活動内容

日程：2014年9月9日、9月10日 9月11日

活動場所：ナバイス小学校（9/9、9/10）

FJK 小学校（9/11）

詳細

① レクチャー

昼食前の時間を活用させて頂き、手洗いの大切さや、手を洗うタイミング、手の洗い方などを示した紙芝居を中心とするレクチャーを実施しました。紙芝居の途中ではばい菌に仮装したスタッフの演出もあり、子供たちがより楽しめる企画となりました。

② 手洗い実習

昼食前には手洗いの実習をしました。レクチャーで伝えた手の洗い方のポーズを子供たちが楽しそうに取り組んでくれました。

3.反省・改善点

- ・レクチャーでの流れや使うツールの段取りを初めからしっかり準備しておくべきでした。後半は改善することができ、子供たちの集中を削ぐこともなくすることができました。

- ・レクチャーの内容はしおりを見なくても話せるくらいに把握しておくべきだったと思います。そうすれば、より円滑に企画を進めることができました。

- ・これは企画全般に言えることですがもっと具体性のある明確な目的とゴールをもって物事に取り組むことの重要性を知りました。

4.総括

去年のプロジェクトでも実施されたこの企画。子供たちがレクチャーを意欲的に聞いてくれており、手洗いの重要性について多くを伝えることができたと感じています。特に手洗い

の方法を示す 6 つのポーズはとても楽しみながら取り組んでいたのも心に残っているのではないかと考えています。

この企画を行ったことで子供たちが少しでも気づきを得て、手洗いの習慣を身に付けてもらえれば幸いです。私たちもこの活動で気づいたこと、得たものがたくさんあると思うので、この反省や経験を活かして、今後の自分や次回のプロジェクトの向上につながるよう努めていきたいと思っています。このプロジェクトに協力していただいた皆様に感謝します。



オープニングセレモニー・フрендシップナイト

文責：井口 実穂

活動概要.

活動行程：9月7日 昼食時 / 9月14日 午後+夜

活動場所：LOOB ベース (ISAP05 活動拠点) / ナバイス小学校グラウンド 教室内

内容要約：オープニングセレモニー 自己紹介 文化紹介 キャンプソング

フрендシップナイト 料理紹介 歌 ダンス

1. 企画概要

オープニングセレモニー(Opening Ceremony：以下 OC)・フрендシップナイト(Friendship Night：以下 FN)はフィリピン人キャンパー、NGOLOOB スタッフ、ホストファミリー、ナバイス村(イロイロ市:ナバイス村)の方たちとより良い信頼関係を築くと共に、感謝の気持ちを伝え、互いの心に残るような時間の共有をすることを目的として実施をさせて頂きました。イロイロ市に到着し、次の日に LOOB ベース(ISAP05.LOOB の活動拠点)に向かい実施したのが OC、小学校での全てのレクチャーを終え 9 日目に実施したのが FN です。OC でこれからお世話になる方々に感謝の気持ちを伝えることに重点を置き、自己紹介、キャンプソングと一緒に歌うなど早くキャンパーやスタッフ同士が打ち解けられるような企画を実施しました。FN ではお世話になったホストファミリーへの感謝の気持ちを伝えることを目的とし、ダンスやゲームなど一緒に楽しめお互いの心に残るような企画を実施させて頂きました。ここでは OC と FN の企画経緯、企画内容、反省・改善点の 3 つの段階を経て企画報告とさせていただきます。

2. 企画経緯

第1回国際協働プロジェクト(ISAP01)から実施されているOC.FNですが、キャンプを共にするフィリピン人キャンパーやLOOBスタッフ、関わる全ての皆様との信頼関係構築は国際協働活動においてとても重要な役割を果たすと考え実施に至りました。「協働活動」において信頼関係は必要不可欠であり、片方の力だけでは「協働活動」は実行することは出来ません。レクチャーにおいても、子供たちへの通訳をお願いしたり、フィリピン人の視点からアドバイスをもらったりするなど様々な点において信頼関係は必要となってきます。互いがコミュニケーションを円滑にとることによって、レクチャーをより良いものに変えることができ、またキャンプ全体の雰囲気も良くすることができます。お互いの国の人々が信頼関係を築くことによって「国際協働」の質を高め来年に、再来年に続いていくことを願っています。フィリピン人、日本人の互いにコミュニケーションをとることにより、信頼関係を築くことが出来、意思疎通がスムーズになり、すべての企画にフィリピン

人、日本人の考え、想いを盛り込むことが可能になると思い今回のOCとFNの実施を決定するに至りました。

3. 企画内容：OC

企画の内容として「自己紹介」「文化紹介」「キャンプソング」の3つを構成要素としました。OCはフィリピン人キャンパー、LOOB スタッフ、ナバイス村の方々に向け「これからお世話になります。よろしくお願い致します。」という気持ちを伝えると共に、互いのキャンパーやスタッフの緊張を解くことを目的とし実施しました。初めに国内で事前に準備していたパワーポイントをプロジェクターに映し ISAP05 メンバーの自己紹介をさせていただきました。自己紹介の内容として「名前」「趣味」「お気に入りの物」「行ったことのある国」を各自発表しました。それぞれのメンバーが緊張した面持ちで英語での自己紹介をしていました。これからキャンプを共にする上で相互理解はとても重要になると考えます。ここで発表したことが少しでも信頼関係への構築へ繋がると良いと思いました。「文化紹介」では私たちの母団体である国際学生協会(International Student Association:以下 ISA)の持つ6支部・東京・京都・大阪・神戸・岡山・九州に加え、北海道と沖縄の観光地紹介をしました。地図に色を付け各都道府県の位置を示し、名産品や建物の写真を見せながら英語でプレゼンテーションを行いました。フィリピン人キャンパーは物珍しそうに見入ってくれていて、より日本の文化についても知っていただけたのではないかと思います。OCの最後にはフィリピンでも日本語で歌われていてよく知られている「スピッツ：チェリー」を共に歌いました。日本語の歌詞と英語の歌詞と意味の書かれた模造紙を見ながら、フィリピン人キャンパー、LOOB スタッフと共に楽しんで歌うことが出来ました。このキャンプソングは、キャンプ中にもよく口ずさまれていたので、互いの仲を深めるという点での目標を達成することに役立ったと感じています。

4. 企画内容：FN

FNではホストファミリー・フィリピン人キャンパー・LOOB スタッフ・携わって下さった皆様への感謝の気持ちを込め「文化紹介」や「歌・ダンスなどの出し物」を実施致しました。事前の準備段階で日本人キャンパーは「日本料理」、フィリピン人キャンパーは「フィリピン料理」の準備を進めていました。私たちは「豚の生姜焼き」「焼きそば」「フルーツポンチ」の3品を用意しました。フィリピン人キャンパーは「Pancit Molo(イロイロ市で食べられている料理・小麦の皮で肉を包んだもの)」「Sweet and Fish Fillet(揚げた魚にオイスターソース、酢、切った人参などを加えてで作ったソースをかけたもの)」「Pumpkin Dlight : Kalabasang Maha」(つぶした南瓜にコンデンス、ココナッツミルク砂糖を加え固めた羊羹のようなデザート)などを用意して頂きました。調理が始まる前に、FNでいただく「レチョン(豚の丸焼き)」の準備をしました。普段日本で私たちは、さばき終わって綺麗にパック詰めされたお肉しか見ることはできませんが、今回は今まで普通に生きていた豚の手足を

縛り棒に吊るし、喉を包丁で刺し、皮を剥ぐという日本では到底体験出来ない体験をさせて頂きました。これだけ大変なことを経て私たちの口に入るのだと再認識することができとても良い経験となりました。目の前で命が絶たれる姿を見て、涙を流すキャンパーもいました。感謝の気持ちを忘れないようにしようと心から思いました。FNが始まってからは各ホームステイ先で「歌」や「ダンス」を披露し合ったり、日本人キャンパーフィリピン人キャンパー、私たち ISAP05 のキャンプと同じ時期に英語研修でフィリピンに来ていた ESAP(English Social Action Program:以下 ESAP)のメンバーもが事前に練習していた「ダンス」を踊ったりしました。歌では私達は kiroro の「Best Friend」を披露しました。小学校でのレクチャーやワーク(食堂建設)など様々なこと共にしてきたみんなと一緒に歌っていると自然と大きな一つの輪になりとても感動的な「Best Friend」となりました。日本人キャンパーも約半年間(実行委員は約1年)国内で一緒に準備をしてきたこと、キャンプを振り返り、時折涙を流していました。共に過ごしてきたフィリピン人キャンパー、LOOB スタッフ、そしてたくさん支えてくれたホストファミリーの皆様感謝の気持ちを精一杯表すことができたかと思います。FNの最後には「ディスコタイム」が用意されており音楽に合わせてホストファミリーの子供たち、キャンパー、LOOB スタッフ、ESAP キャンパーと楽しい時間を過ごすことが出来ました。FNにはホストファミリーをはじめ、バランガイキャプテン(フィリピンにおける最小の地方自治単位の長)、そして村の人々などたくさんの方に来ていただきました。会場は LOOB ベースに隣接するナバイス小学校を使わせていただきました。教室も食事のために開放してくださり大変感謝しております。また音響の設備や照明器具などの準備も現地の方々にお手伝いをしていただきました。たくさんの方のご協力があってこのキャンプ、OCFN は開催することが出来ました。本当に感謝してもしきれない程です。

5.反省・改善点

OC の反省点として LOOB ベースにつく前に宿泊していたペンションでアイスブレイクはしたもののいきなり ISAP05 メンバーの「自己紹介」や「観光地紹介」を始めてしまい少し一方的なものになってしまったと感じました。あちらの用意してくださったアイスブレイクに頼り切るのではなくこちらからも一緒に楽しめて打ち解けることができるようなアイスブレイクをたくさん用意していくべきでした。私たちの掲げる「国際協働」は一方の力では行うことが出来ないものでいつでも互いが協力し合うことを忘れてはならないと反省しました。来年もし、第 6 回国際協働プロジェクト(ISAP06)が開催されるのであれば、もっと互いの緊張をはぐす「アイスブレイキング」などを用意し、一方的な「自己紹介」や「文化紹介」にならないようにフィリピン人、日本人キャンパーの両方が参加できるものにと良いと思いました。OC の最後に歌ったチェリーは成功だったと私たちは考えます。OC で一緒に歌ったことによって緊張が少し解れたと共に、キャンプ中にも各々で歌ってくれていて絆が深まったのではないかと思います。FN は大方のことをキャンパーや LOOB スタ

ップと協力して準備を進めたり、FN を作り上げることが出来たので成功だと感じています。キャンプを共にしてきた皆と最後の大きなイベントである FN を一緒に作り上げることが出来てとても嬉しく思いました。準備の段階から、日本では消極的だったメンバーもいつの間にか自分からどんどん動いていて、このキャンプを通して「協働」を通した「成長」を見事達成したのだと感じました。様々な企画をするにあたり現地の方やフィリピン人キャンパー、LOOB スタッフ、ホストファミリーなどたくさんのご協力を得なければ私たちは成長することも、キャンプを実施することもできませんでした。全ては皆様のご協力のおかげです。本当にまたこの地に戻って来たいと思えるような信頼関係や絆を結ぶことが出来たと思います。感謝の気持ちを忘れないこと OC・FN を通して学んだことの一つです。

Japanese Culture

文責:井口 実穂

活動概要.

活動行程： 9 月 9,10 日 午後 / 9 月 11,12 日 午後

活動場所：ナバイス小学校 3 年生～6 年生教室 / FJK 小学校 3 年生～6 年生教室

内容要約：

1. 活動目的・目標

本活動の目的は3つあります。

1 つめは小学校の子供たちに向けて日本の文化を紹介し、国際的な視野を養ってもらうことです。2 つめは小学校の子供たちと交流を深め食育活動、衛生活動のレクチャーにより興味を持ってもらうための導入です。3 つめは子供たちから逆に私たちキャンパーが何かを得ることが出来るのではないか、フィリピンの子供たちから何か一つでも学ぶことが出来たらと考え私たちはこの活動を実施致しました。

2. 活動内容

本活動の内容として、「日本文化紹介」を軸に「アイスブレイク」「日本の四季紹介」「日本のキャラクター紹介」「日本のキャラクターを使った福笑い体験」「折り紙」を実施しました。この活動は2校の小学校に2日ずつ訪れ、行いました。まず先に訪れた小学校は私たちの活動拠点である LOOB ベースに隣接するナバイス小学校で行いました。

3 年生から 6 年生のクラスにグループごとに分かれて入り、まずフィリピンの言語で「自己紹介」をしました。この自己紹介もフィリピン人キャンパーのアイデアで、フィリピン人と日本人とで企画の共有をする段階でフィリピン人キャンパーのアドバイスを聞き変更をしました。午後の授業ということもあり子供たちが寝てしまわないように「文化紹介」をする前に体全体を使った「アイスブレイク」も取り入れたほうが良いとアドバイスを頂き早速実行しました。このような点で「協働」ということがとても大切になってくることを身を持って実感致しました。「アイスブレイク」は子供たちが飽きてしまわないように1日目と2日目と違うものを各グループで用意したりして工夫を凝らしていました。中には日本語を教えるために画用紙を作成したりしているグループもあり、積極的にかつ柔軟に動く姿に感動しました。様々な企画を通して成長していくキャンパーの姿を見たりすることによって、お互いに刺激し合うことが出来たと思います。「アイスブレイク」では「Head, shoulder, knees and toes」や「日本語伝言ゲーム」など子供達とキャンパーが一緒になって楽しむこ

とが出来ました。また大人と子供の壁もなくす事ができより良い雰囲気で「日本文化紹介」に入ることが出来たと思います。子供たちに楽しんで学んでもらうために「アイスブレイク」はとても大切だと感じました。「日本文化紹介」ではまず「四季紹介」をしました。「四季紹介」では日本の四季を代表する、桜や祭り、紅葉、お正月など様々な行事や自然について紹介をしました。桜などの写真を印刷したものを画用紙に貼り紙芝居調にして子供たちに語りかけながら紹介をしました。時折クイズを入れたり一緒に“321” SAKURA!!”と声に出して日本語で読んだりして子供たちは大変興味を持って聞いてくれました。「四季紹介」の次に「日本のキャラクター紹介」をしました。ピカチュウやキティを始め子供たちは本当に多くのキャラクターを知っていました。国際化の凄さを感じました。次の紹介した日本のキャラクターを使って「福笑い」をしてもらいました。何か子供たちに体験してもらえる遊びはないだろうかと日本人キャンパーと考え、考え抜いた末にキャラクターにも福笑いにも触れてもらえる「キャラクター福笑い」という企画を実施することになりました。子供たちは制限時間のなかで精一杯チームで協力してキャラクターの顔を作り上げていました。私たちが作った福笑いを一生懸命作って楽しんでくれている姿をみて日本人キャンパーもフィリピン人キャンパーも子供たちに文化紹介をして良かったと思えることができたと思います。最後に「折り紙」クラス全体で折りました。鶴や犬、チューリップなど様々な難易度の物を用意していき、黒板の前で見本を見せゆっくりと一緒に折りました。つまづいている子には個人で助けに行き、一緒に折ってあげると「Arigatou!」と笑顔いっぱいでお礼を伝えてくれました。子供たちの笑顔に何度救われたか分かりません。この日本文化紹介でも、フィリピン人キャンパーは一生懸命子供たちに私たちの英語をフィリピンの言葉に訳して伝えてくれたり、子供たちを落ち着かせるために「1group Are you ready? 2group Are you ready?...」と子供たちの集中をうまくコントロールしてくださいました。このキャンプはフィリピン人キャンパーなしでは成立しない「協働プロジェクト」なのだと改めて実感することが出来ました。最後に各小学校に1冊ずつ事前に用意していた日本文化紹介のアルバムをプレゼントしました。私たちがここに来たことをアルバムを見て思い出してもらえたらと思います。

3. 反省・改善点

日本文化紹介の反省点として3点反省する点があります。まず1点目は訪れる小学校が2校×4クラスで、用意していた折り紙が少し足りなくなってしまう、もっとやりたいという子供たちの声に応えることが出来なかったことです。2点目は福笑いで順番争いが起きてしまったことです。この点についてはフィリピン人キャンパーが上手く対処してくれましたが私たち日本人キャンパーはあまり子供たちの扱いに慣れておらず少しあたふたしてしまいました。もう少し子供の扱い方を学び子供の立場にたって物事を考える力を養えたらと思いました。3点目はFJK小学校でのあるクラスで、床が竹で出来ていて隙間があって福笑いのパーツが落ちてしまうため福笑いをする事が出来なかったクラスがあったことで

す。今年は道具の必要な企画が多かったため、何も準備のいらない遊びや文化紹介も視野に入れておくべきだったと反省しています。しかし各グループが工夫を凝らし子供たちがどうしたら興味を持ってくれるか楽しんでもくれるかななどを一生懸命考え取り組んでいたのも日本文化紹介の大方は成功だったのではないかと思います。ナバイス、FJK 小学校の先生、LOOB スタッフ、フィリピン人キャンパーの協力のもとこの企画は成功することが出来ました。



ワークショップ

文責：井口 実穂

1.活動概要.

活動行程： 9 月 8 日 午後

活動場所： LOOB ベース(活動拠点)

内容要約 ・ ワークショップ 「テーマ:相国間で売れるお菓子の開発」

2.活動目的・目標

ワークショップを通して国ごとの考え方の違いを知り、ギャップを感じ視野を広げてもらい、今後世界平和を考えてもらうためのきっかけづくり、またこのワークショップを通してキャンパー同士の仲を深めることが本活動の目的です。母団体、国際学生協会(International Student Association:以下 I.S.A)の理念である「世界平和への貢献」「対話を通じた相互理解」にもこのワークショップの目的目標は通ずるものがあると思います。国際問題を解決するためには何が必要か、今後社会を担うであろう日本人、フィリピン人キャンパーが今後世界の問題などについて考えていくきっかけや題材になったらと思い企画を実施いたしました。もう一つのサブの目的として「両キャンパーに海外の人たちとのディスカッションの経験をしてもらう」というものがあります。「お菓子」という身近なテーマをきっかけとして、お互いの国の違いや共通点を知り、対話を通じた相互理解を目標にこのワークショップを実施しました。今後の社会を担う若者たちが交友を深め、世界の問題へのアプローチのきっかけとして繋げてもらえたと思っております。

3.活動内容

ワークショップ：「テーマ:相国間で売れるお菓子の開発をしよう」

フィリピン人キャンパーと日本人キャンパーで約 6 人程度のグループを作り「フィリピンと日本で売れるお菓子を開発してみよう。」というテーマでワークショップを実施しました。オープニングセレモニーから 1 日と、まだ打ち解けきれていないフィリピン人、日本人キャンパー同士がこの企画を通して信頼関係を築き小学校で今後行われるレクチャーがより良いものになるようにと考えました。誰もが話しやすい「お菓子」についてをテーマに選び、互いの国の文化を話し合ってもらいそこから交流することで様々な分野で視野を広げてもらえたらと考えました。まず始めに、フィリピンと日本、各国で人気のあるお菓子を紹介し、食べ比べをしてみて、どんな違いがあるのかディスカッションしてもらいました。日本人キャンパーは「ハッピーターン」「カントリーマアム」を、フィリピン人キャンパー側は(LOOB スタッフが今回お菓子を用意)「バナナキュー(バナナに砂糖をつけて揚げたお菓子)」「ポーク・チッチャロン(豚の皮を揚げたお菓子)」を用意し紹介し合いました。私たちにとってバ

ナナの甘いお菓子は何となく馴染みあるものでしたが、豚の皮を揚げたお菓子はあまり馴染みがなく新鮮に感じました。普段豚を殺して調理する、または市場に豚が多く売られているフィリピンの普段の背景が関係しているのだと分かりました。フィリピン人キャンパーは「カントリーマアム」は好んで食べてくれましたが、日本でとても人気の「ハッピーターン」は《海の匂いがする。》《臭いが苦手。》と、フィリピンではあまり受け入れられない味、匂いということが分かりました。「お菓子なら万国共通だろう！」と考えていた私たちはいい意味でこの考えが覆されました。こういった点からも、国を超えて様々な考え方の違いや文化的背景、価値観があるのだということを学ぶことが出来ました。戦争や歴史摩擦などの解決へのアプローチとして、まずは相手のことをもっとよく知り、歴史や生活を理解し、様々な視点で考えることが大切なのだとこのワークショップの通じて感じる事ができました。お菓子を食べ比べした後に、「フィリピン」と「日本」では「どんなお菓子」が「有名・人気」なのか、また「どのような宣伝方法」で「お菓子が売られているのか」などを話し合ってもらい、最後に班ごとに「フィリピンと日本の両国間で売れるようなオリジナルのお菓子」を考えて模造紙に書いてもらい発表してもらいました。「囓んでいるうちにフィリピンで人気の味から日本で人気の味に変化する(例：マンゴー味→ベリー味、ココア：ミロ味”フィリピンの子供たちに大人気”→抹茶味) **Miracle gam**：ミラクルガム」や、サリサリストア(フィリピンの駄菓子屋)を背景にした、「たったの 15 ペソのスナック菓子」などユニークな商品が続々と考えられていきました。日本人キャンパーとフィリピン人キャンパーが楽しんでこのワークショップに取り組んでくれたことが何よりの収穫です。またレクチャーなどの今後の活動に良い影響を与えることが少しながら出来たと思います。新しい価値観や情報を与え合うことによって柔軟な考えや協調性を養ってもらえたのではないかと感じます。この企画でも LOOB スタッフの皆さんにはお菓子や模造紙の準備を事前にして頂き、どの企画でもたくさんの方のご協力により私たちの「国際協働」が成り立っていることを感じました。

4.反省・改善点

ワークショップの反省点として、フィリピン人日本人キャンパーがこのワークショップをやる目的をほとんど知らなかったことが挙げられます。私たちの行う「協働活動」において目標は必要不可欠なものであると考えます。何故かというと文化も言葉も違う私たちが何の目標も無しにただ活動をして、「やり終わった後に何が残ったのか」「何を成し遂げたのか」が分からなくなってしまうためです。せっかく違う国の人々が集まってキャンプをしているというのに、目的やゴールを設定せずに走ってしまうことによって団結力や協調性は一気になくなってしまいます。このようなたくさんの方にご協力を頂いている貴重な機会を無駄にしては、5年6年と続けている意味がなくなってしまうと思います。ですからもし来年にこのようなワークショップ、またはディスカッションを実行するならばワークショ

ップの目標・目的・ゴールを明確にし、フィリピン人日本人キャンパーに企画を行う前にしっかりと共有をしておくべきだと感じます。また、テーマを今回は「話しやすいテーマ」という点に重点を置きすぎていて少し中身が伴っていないと思ったので来年実施する際には互いの将来の為になるようなテーマにし、しっかりと事前に準備をしていくことが大切だと感じました。

Interaction with college student

文責：井口実穂

1.活動概要

活動行程： 9 月 15 日 午後

活動場所：ウエストビサヤ州立大学 (West Visaya State University)
パナイ島イロイロ市

内容要約：ディスカッション「幸福度について」

2.活動目的・目標

本活動の目的は3つありました。

- ① ディスカッションを通し日本とフィリピンの考え方の違いを知り
今後生活するうえで考える題材にするため。
 - ② 海外の人たちとのディスカッションの経験をしてもらい柔軟性や協調性をつけてもらうため。
 - ③ お互いに知識を深めることで将来的に応用させてもらうため。
- この3つの目的をもとにウエストビサヤ州立大学の学生の皆さんとのディスカッションを実施させていただきました。

3.活動内容

- ・ディスカッションテーマ 幸福度について
- ・ディスカッションの目的 (Purpose) 互いの知識を深め合い将来的に応用させる
- ・タイムテーブル

- ① 団体紹介 ISAP05 について,自己紹介 ISAP05, LOOB スタッフ, フィリピン人キャンパー
- ② グループ分け, アイスブレイク：人間知恵の輪(Human Puzzle) (使用言語英語のみ)
- ③ ディスカッション目的、内容などの全体説明 ディスカッションをする場所へ移動
- ④ グループごと自己紹介 幸福度についてディスカッション I , 劇の準備
 - ・あなたの普段の生活での幸福度は何%ですか？(100%中)
 - ・あなたにとってしあわせとは何ですか？
 - ・どんな時に幸せを感じますか？(ポストイットに書いて各自発表する)
- ⑤ 典型的な幸せについての劇各班発表

- ・in フィリピン 家族、友達、大学
 - ・in 日本 家族、友達、大学
- ⑥ 幸福度についてディスカッションⅡ
- ・フィリピンと日本お互いの国がより幸せになるためにはどうしたらいいか
 - ・フィリピンの日本の悪い点良い点を出し合って話しあう
- ⑦ 共有 模造紙に英語でフィリピンと日本に対する提案を書き出し英語で発表

ディスカッションではテーマは幸福度について話し合ってきました。このテーマにした経緯は日本とフィリピンでは日本のほうが技術や経済では発展しているのに国際的に見たらフィリピンのほうが幸福度の順位が上だということを知り、それは何故なのか、幸せの秘訣は何だろうかと知ることが出来たらと思いこの企画の実施に至りました。

今回ご協力を頂いた学校は、パナイ島イロイロ市にあるウエストビサヤ州立大学 (West Visaya State University) というイロイロ市で一番歴史のある大学にご協力を頂きました。今回は Political Science (政治) 学部、AB English (英文) 学部の生徒の皆さんとディスカッションをしてきました。ウエストビサヤ州立大学の学生約 50 名、日本人、フィリピン人キャンパー 27 名総勢 70 名近くの大所帯でディスカッションを実施しました。ディスカッションの前には L00B スタッフがキャンパスツアーとして校内を案内してくださいました。私たちの行った時間帯が丁度お昼時だったこともあり、たくさんの生徒が外のベンチや芝生でランチをしていました。学長室に行き挨拶を済ませてから大学の説明や写真撮影を行いそのあとにディスカッションを行う教室に向いました。自己紹介や団体紹介を済ませた後アイスブレイクの人間知恵の輪をグループごとにしました。フィリピンの大学生はとてもフレンドリーですぐに打ち解けることが出来ました。その後グループごとに分かれて再度自己紹介をし、幸福度についてのディスカッションに入ってもらいました。まず始めに、「あなたの普段の幸福度は 100% 中何%ですか?」「どんな時に幸せを感じますか? あなたにとって幸せとは何ですか?」という質問の答えをポストイットに書き込んでもらい各自で発表してもらいました。幸福度のパーセンテージについては、やはりフィリピンの方が「80%」や「90%」と高く日本人キャンパーは「40%」、「60%」など普段の生活への満足度は低めという結果になりました。あなたにとって幸せとはなんですか? どんな時に幸せを感じますか? という答えに対しては「家族といるときが幸せ」「友達とランチしている時が幸せ」「お祈りしている時が幸せ」「寝るときが一番幸せ」など普段の生活で何の変哲もないような幸せが多くありました。ディスカッションの途中には、フィリピン人キャンパーのアイデアである「幸せについての劇」をグループごとに準備して発表し合いました。フィリピン人、日本人にとって家族、友達、大学での幸せというお題でグループごとにユニークな劇を演じてもらいました。フィリピン人の家族との幸せをテーマとした劇では、午前中にお祈りに行ってお昼を家族で食べ一日を一緒に過ごすという家族の絆が見受けられるような劇でフィリピンの人との繋がりや強さを感じられることが出来ました。劇が終わった後には更に深い

ディスカッションに入ってもらい「お互いの国をより幸せにするにはどうしたら良いか」ということをゴールとして見据え話し合いをしてもらいました。

各グループの発表を下記にまとめました。

フィリピンをより良い国にするにはどうしたら良いか。

貯金をする

もう少し働く

インフラを整備する

高度な科学技術やテクノロジーの発展をさせる

もう少し協調性をつける

計画性を養う

想いを言葉にする

礼儀正しくする

謙虚になる

良い成績を取る

衛生面の改善

食事をきちんと取る

GO, GLOW, GROW を考えてバランス良く食べる

自分自身を見つめ直すためにたまには一人になる

富裕層は貧しい人に手を差し伸べる

スモークーマウンテン(カラフナンのゴミ山)に住む人たちへ仕事と住む場所を提供する

日本をよりよい国にするにはどうしたらよいか。

家族との時間をもっと大切にして、家族との絆を深める

文化が豊かなためそれを維持する

もっと積極的になる

働きすぎない

もっとコミュニケーションを取る

もっとアクティブになる

電子機器類を使う時間を減らす

小さいことを気にしない

ネガティブな雰囲気にならない

自分を大切にする

自分を信じる

宗教を大切にする

常に笑顔でいる

質の良い時間を過ごす

個人の時間をつくる

自分を好きになる好きなことをして、それをしている自分を好きでいる

ポジティブでいる

今という時間を大切に過ごす

お互いの国の改善すべき点をこのディスカッションによって出し合うことにより本当に大切なことは何なのかを再確認することができたと思います。

4.反省・改善点

今回、国際協働プロジェクトで初の試みである大学生とのディスカッションを実施するにあたって本当に様々な反省点がありました。まず準備が不十分であったことです。いくら初めての試みであるからといって、テーマだけ決めてあとは自由にディスカッションをどうぞ始めてください。というだけではやはり足りない部分がありました。それに加え日本人キャンパーの英語力が低いこともあり思った通りのディスカッションとはいきませんでした。来年もしこの企画を実施するのであれば、日本でしっかりと英語でのディスカッションの練習をし、多くの方が司会進行を出来るようになっておくことが必要だと感じます。何故かという、当日になるまでこちらの人数は分からないことが多く柔軟な対応がこのキャンプには求められるからです。国内での事前のリサーチや準備など様々なパターンを想定して準備をしていく必要があります。今回は身近で話しやすいテーマとして「幸福度」を選びましたが、更にここから発展させ、「ゴミ問題、宗教、ジェンダー、政治問題、格差、戦争」になどについてのディスカッション等も繰り広げていけたらと思います。たくさんの反省点がありながらも LOOB を率いる小林幸恵さんを始めフィリピン人キャンパーや日本人の LOOB スタッフの方など本当に沢山の方からアドバイスを頂き、このディスカッションを作り上げることが出来ました。準備の段階からディスカッションの目的、テーマ、アイスブレイク、内容までひとつひとつフィリピンの大学で行っても大丈夫なように様々な方々からアドバイスを頂きたくさんの段階を経て改善をしていきました。ウエストビサヤ州立大学の皆さんの授業を1時間削って実施させて頂くということもあり、しっかりと目標を達成できる内容にしようとフィリピン人キャンパーや LOOB スタッフの皆さんと共に何度も話し合いタイムスケジュールを組み、司会はどうするか、グループ分けはどうするかなどひとつひとつ丁寧に決めていきました。企画は日本で全て準備していくのではなく、現地の生の声を聴きそれを企画に盛り込み改善して初めて完成となります。こういった準備の段階から「協働」を実感することが出来ました。フィリピン人キャンパーや LOOB スタッフに感謝してもしきれません。私たちが英語をなかなか理解できず話合いが進まない時でも優しくフォローして下さいますし、いつだって根気強く私たちの声に耳を傾けてくれました。私たち日本人キャンパーもそのような姿勢を見て、相手の期待に応えようと必死に食らい

ついていたように思います。時に悩み、落ち込んだ時にも側で支えてくれて励ましてくれる。互いの思いやりや、優しさが「協働」や「相互成長」に繋がり「信頼関係」の構築にも繋がっているのだと本当に感じました。そして心から「楽しい！！」「ここまでやってきて良かった！」と長かった国内での準備が、実を結びはじめるということも実感することができました。どの企画でも皆さんが助けて下さり、本当に親身になって相談にのってくれ本当に心強かったのを覚えています。



Work Activity

文責：金行 彩那

1.活動目的・目標

LOOB スタッフ、フィリピン人キャンパー、ISAP メンバーで協力してワーク活動を行うことでお互いに絆を深めることを目的としています。

2.活動行程

9 月 10 日午前

9 月 11 日午前

9 月 12 日全日

3.活動場所

ナバイス小学校

4.活動内容詳細

去年 ISAP04 で建設したナバイス小学校の食堂のペインティングを LOOB スタッフの方々、フィリピン人キャンパー、ISAP メンバーで行いました。Work Activity は 3 日間にかけて行われました。フィリピン人と日本人混合の約 5 つのグループを作り、3 日間とも異なるメンバーで、それぞれ食堂の外と中で分かれてペインティングを行いました Work 前には全員でその日の作業内容や注意点などを共有するためミーティングが毎回行われました。1 日目と 2 日目は午前中のみ Work でした。1 日目は下地となる白色のペンキを塗り、2 日目も同じように上から白色のペンキを重ね塗りしました。そして最後の 3 日目は 1 日中 Work を行いました。この日は、仕上げとして黄緑色のペンキを塗りました。それぞれのグループでペンキを塗る人、ペンキ入れを持つ人、高いところを塗るときはイスを支えるなど役割分担をしながら作業を行いました。

5.企画の改善点

私たち日本人がペンキ塗りに慣れていなかったため、LOOB スタッフの方々やフィリピン人キャンパーにほとんど仕事を任せっきりになってしまっていたと感じました。また、当初の予定では 13 日は午前中に Work で午後は小学校訪問の予定でしたが、小学校訪問が無くなり全日 Work activity に変更になりました。そのため、暑い中ペンキを塗るという作業に飽きてしまっていた人もいたように思います。また、ペンキを塗る刷毛も全員分はなかったため、どうしても手が空いてすることがない人が出てきてしまっていました。Work Activity は私たち日本人と LOOB スタッフ・フィリピン人キャンパーで協力して一つのものを作るという点で、この活動も小さいかもしれ

もせんが協働活動でもあります。そのため、フィリピン人に任せっきりにするのではなく、積極的に **Work Activity** にも参加できたらいいなと思いました。

6.総括

Work Activity は去年 ISAP04 が建設した食堂を、ペインティングを行い完成させるという2年にかけて1つのものを完成させるというのは、私たちにとって非常に達成感のあるものになったのではないかなと思います。仕事を主に LOOB スタッフ・フィリピン人キャンパーに任せっきりになってしまいましたが、ナバイス小学校の子どもたちがこれから使う食堂の建設に私たちに関わることができたということはとても嬉しいことです。そして、この **Work activity** を通してフィリピン人と日本人で同じ活動を協力しながら行うことで、より絆も深まったのではないかなと感じます。自分の担当箇所が終われば、まだ終わってないグループのところを手伝うなど、みんな周りを見て行動できていたのではないかなと感じました。



第 4 章

参加者感想

ホームステイ感想(1)

ホームステイ感想(2)

第 5 回国際協働プロジェクト 参加者感想(1)

第 5 回国際協働プロジェクト 参加者感想(2)

ホームステイ感想(1)

担当：松嶋 秀太

私はフィリピン渡航が今回で2回目、そしてホームステイでの経験も2回目だったのでイロイロでのホームステイも刺激的で温かくて2回経験しても大切なことに触れられた気分でした。

私がホームステイした先は LOOB ベースから一番遠く、ぬかるんだ草原を超えた先にあるお宅でした。雨季なのでぬかるみの程度がひどく気をつけていないとフィリピン人の方でも転んでしまうくらいでした。そんな危険な道のりにも関わらずフィリピンの方々が手を差し伸べて引っ張っていく姿がすごく印象的でした。最初は一人で進むのが困難だったのでフィリピン人に頼りきってしまいました。到着すると2階建てのコンクリートの一軒家で私が見た数々のフィリピンの家の中でも立派な家の一つでした。中もすごく清潔でキッチンも広くテレビもスピーカーもあり、冷蔵庫も完備していて大金持ちだなと感じました。しかし、フィリピンの中で考えて立派というわけであり日本の家の便利さや清潔感とはほど遠いものがあります。たとえば、動物や昆虫です。ヤモリは家の中に常に入っていますし、カブトムシもゴキブリもアリもクモもいました。なかでも印象的だったのは、ゲッコーというトカゲです。私は姿こそ見ていませんが、鳴き声にびっくりしました。「ゲッコー、ゲッコー」と早朝、深夜に大声に鳴くので驚きました。お風呂もシャワーではなく雨水を溜めたものを桶で浴びていました。フィリピンの生活レベルの中では満ち足りているはずなのに日本の家と比べるとまだまだ原始的で土着的な生活が営まれていました。

フィリピン人はとにかく温かく迎えてくれます。客人を優先して行動します。これは最初の LOOB さんのレクチャーで分かったことなのですが、客人をもてなす習慣が国民レベルで存在しているそうです。私は今回のホームステイでも存分に感じることができました。例えば、食事のときや入浴のときなど、私たち日本人キャンパーとフィリピン人キャンパーの方を優先させます。その間見守りつつ会話をしながら楽しみます。そして自分の番は一番最後にとっておくのです。細かな配慮だと思いますが驚きました。日本では一緒に食べることが美德だと考えがちですが、フィリピンでは客をもてなす際、何よりも客人を優先させることを痛感させました。そのぐらいフィリピン人のもてなしは日本人のわれわれが想像する以上に敬われ、もてなすのです。私はこのことに驚きました。

最後のクロージングセレモニーではナナイ（ホームステイ先のおばあちゃん）が泣きました。私は、疲れてしまい夜寝込むことが多かったのですが、必死に私に話しかけようとするナナイの姿を毎日みました。積極的に話していましたがやはり会話自体の数が少なかったのでコミュニケーションがとれているのか不安でしたが、ナナイの泣いている姿を見てさみしさを感じているんだなとすごく温かい気持ちともう少し関われる努力をすべきだ

ったなという後悔の気持ちが現れました。私は機会があればまたイロイロへ戻りナナイとたくさんおしゃべりしたいです。ホームステイの経験はこれまでもありましたが、また新しい価値観や知識、教養そしてフィリピン人の温かさに触れることができ非常に良かったと感じております。

ホームステイ感想(2)

担当：田路美奈帆

フィリピンに滞在している10日間の間、私たちはナバイスの村でホームステイをしていました。フィリピン人キャンパーのクリスティンと日本人キャンパーのあやかさんの3人で同じホームステイ先で一緒に過ごしました。ホームステイをするのが初めてだったので、いろいろと不安でしたが、2人のおかげでホームステイで困まることもなく、楽しく過ごすことができました。唯一大変だったのはお風呂とトイレでした。お風呂場がないため外の井戸で水浴びをするのがお風呂の代わりで、トイレが手動の水洗トイレなので流すのになかなか大変でした。それでも少しずつ慣れてきて最後の方は上手になっていました。

ホームステイ先のラウニオファミリーは7人一家でした。日本で7人家族というと大家族のようですが、フィリピンでは珍しいことではありませんでした。フィリピンではどの家族もたくさん子どもがいて賑やかで、明るいという印象をうけました。子どもが元気があるのはどこの国でも共通なのかもしれませんが、フィリピンの子どもたちは特に元気で人懐っこいと感じました。ホームステイ先の子どもたちは年齢に差があって、一番上のお姉ちゃんは20歳で1番下の子は10歳でした。1番下の女の子は毎日夕方になると LOOB ベースまで私たちを迎えに来てくれて、手を繋いでホームステイ先にまで連れていってくれました。街灯はほとんどなく真っ暗の中で懐中電灯の光を頼りにホームステイ先まで毎日歩いていきました。15分ほど歩くのですが、子どもたちとわいわいしながらだとあっという間で、気が付けばホームステイ先に行くのがとても楽しみになっていました。

昼の間は LOOB ベースでミーティングがあり、レクチャーをしに小学校に行っていたのでホームステイ先で過ごすのは朝と夜が主で、週末のみお昼まで家族とゆっくり過ごしました。朝起きるとナナイ(お母さん)が朝ご飯を作ってくれていました。ナナイのご飯は本当においしくて毎日お代わりをしていました。夜はホームステイ先の家族とトランプをし、ゲームをして笑いの絶えない毎日をすごせました。フレンドナイトシップの後、普段はあまりしゃべらないタタイ(お父さん)とお酒を飲みながら話せたこともとても印象深いです。

フィリピンの家族は私たちにとっても優しく接してくれて、本当の家族のようでした。ホームステイ先で過ごせたことは私にとって大切な思い出です。

参加者感想(1)

担当：加地 浩幸

私がフィリピンで学んだことは2点あります。

一点目は人と人との絆の強さ、また人の良さです。L00B スタッフの親切さを感じたことはもちろんなのですが、特にホームステイ先でのホスピタリティは常に私の心を温かく満たしてくれました。友人、家族、近所の絆がとても強くさらに地域コミュニティー単位で互いに協力しながら生活をしていました。噂がすぐに広まるのもそのせいかと感じます。確かに日本ほどフィリピン全体の家庭は裕福ではありません。しかし、彼らはいつも笑っています。その幸せも大切な人が沢山身近にいるからこそ、そんな人たちと過ごしているからそこだと思います。

日本は‘物’で溢れかえり、子供から老人まで電車を使い、今では小学生が当たり前のように携帯など使用し非常に便利な生活を送っているでしょう。しかし、その反面かつての日本にもあった人と人との繋がりや心、さらに、地域単位での交流や絆を失ってしまっているでしょう。この意味では、日本はただ単に‘贅沢’であるだけかもしれないでしょう。フィリピンはこれから更なる発展を遂げるでしょう。マニラの発展はもちろん地方でも高層ビル、ショッピングモール、ホテルなどが急速に建設されていました。実際に、フィリピンは私が想像していたよりも非常に発展をしていました。それゆえに、日本、また二本人が気付かずに失ってしまったものを彼らには見失わずにいて欲しいと心から思いました。

この経験を私たちの家族、友人、地域コミュニティーの関係を改めて考える機会を頂けたことは幸いにも ISAP に参加できたからです。

二点目はフィリピン人キャンパーと日本人スタッフを通して、言語の壁の難しさも改めて学ぶことができました。いわゆる、LANGUAGE BARRIER です。その問題の中で特に意識させられたことは、お互い共通の言語を使用してコミュニケーションを取ることとボディランゲージを使用してのコミュニケーションの違いです。私が感じたボディランゲージの最大の欠点は、確かに「このようにしたい」という意志は相手に伝えられかもしれないが、コミュニケーションを取る上で非常に重要な‘理由’正確に伝えることが困難なことであると理解しました。ISAP は‘協働’を掲げ活動しています。私たちが意図する‘協働’のレベルにまで達するには自分の‘意見’を伝えることはもちろんのこと、加えてその‘理由’までしっかりと相手に伝えるコミュニケーションの不可欠でしょう。英語力の未熟さは日本でのミーティングである程度感じてはいましたが、いざフィリピンで活動してみるとそれが浮き彫りになりました。これは、日本でしっかりと ISAP 全体としてその克服の努力を充分にしていなかったことが問題点として挙げられるでしょう。

この反省を活かすために、来年のミーティングでは 5W1H といわれますが、それを実際の会話で使えるぐらいにまで英語の企画時間に練習をすることが必要です。特に REASON、理由をはっきりと正確に相手に伝える練習に重点を置くべきでしょう。

参加者感想(2)

担当：橋本 望

第 5 回国際協働プロジェクトに参加し、事前勉強会や他団体との交流、学童訪問などの国内活動と、12 日間の国外活動でたくさんのことを学びました。特に国外では、フィリピン人と協力し、活動することを通して、言語の異なる地で活動することの難しさ、一方でチャレンジすることの楽しさを知りました。このような機会を与えてくれたことに感謝しています。

国際協働とは何なのか、国内活動が始まった時からメンバーで話し合い、共通の意識を持って取り組めるよう「ISAPに関わる人たちと共に企画を作り上げていくこと、また、その過程で刺激を受け成長し、その成長が他者の成長につながるような結果としての相互成長」というものであると定義しました。私は、国外活動を通して、協働のためにはお互いが十分に時間をとって話し合い、一つ一つの活動を終えた後、評価し次につなげることが大切であると気づきました。例えば、小学校での活動であれば、私たち日本人が用意しているアイスブレイクがフィリピンではメジャーではないということがありました。そんな時、フィリピン人キャンパーが少しアレンジを加え、フィリピンの子供たちが楽しめるゲームにしてくれました。また、今回の国外活動では3日間小学校を訪問しましたが、一日目・二日目の反省を生かし、次の日にはより良い企画を行うことができました。日本人・フィリピン人それぞれの立場から意見を言い合い、レクチャーなどを工夫でき良かったです。

小学校の企画活動だけでなく、フィリピン人キャンパー、LOOB スタッフのおかげで国外活動はとても充実したものになりました。シティツアーに出かけたときは、市場や広場の名前などを教えてくれました。ホームステイ先では家族との間に入ってコミュニケーションをとれるように通訳をしてくれました。多くの面でサポートをしてくれ、たった12日間という短い期間でしたが、**Best friend** といえるような関係になりました。そんな彼らと別れるのは、本当に寂しく涙が止まりませんでした。またいつか再会できることを願っています。

第 5 章

実行委員長全体総括

実行委員長総括

私は大学1年生の12月からこの国際協働プロジェクトに携わり、本年の12月で丸2年が経とうとしています。昨年に実行委員として携わった後に私自身に問うたことは何を与え、何を学んだかということでした。しかし、その質問に答えられない私がありました。本プロジェクトの目的は「自己成長に伴う他者の成長への貢献」です。現地での活動は見るものすべてが新鮮でとても楽しいものでした。しかし、楽しさに負けてしまってなぜフィリピンに来たのかという目的を忘れていたのではないかと思い、私自身の課題を見つけました。本年は実行委員長として、成長を見据えた学びあるプログラムにしたいという思いで、この一年間取り組んできました。国内活動では国際協力系の他団体との交流会や母団体会員に向けた広報、月に一回行われる会議もしくは合宿などでは英語企画を取り入れ、フィリピンについての勉強会や本年から新しい参加者への開催目的などの共有などに力を入れてきました。しかし、国外活動を通して見えてきたことは多くの課題でした。

初めに目立ったものが英語という言葉の壁でした。メンバーの英語力には差があり、支障なく流暢に話せる人からサポートが必要な人まで様々でした。協働というからには現地の方（特に LOOB スタッフやキャンパー）とのコミュニケーションはとても大切になってきます。しかし、苦手意識から積極的に話しかけられない状況にいた人が目立っていたように見えました。また、小学校でのレクチャーの際もしおりの英語に頼ってしまい、アイコンタクトが少し不足していたように感じました。4日ほどすると慣れてきたのか積極的に話し出す人が増えてきましたが、英語に対する苦手意識を克服できるよう努めるべきであったと考えました。次に目的の部分です。日本では本プロジェクトの開催目的については幾度となく確認し全員が理解したうえで臨みましたが、各企画の目的についてはそれほど多く共有をすることはありませんでした。しかし、その共有を怠ったことで何のためにこの企画を行うのかというゴールが浸透せず、見失いかけたことがありました。ミーティングを重ね同じ方向に歩みだすことができましたが、目的を理解しないまま行動すると、まったく意味のないものになってしまう怖さを知りました。

反省の多いプロジェクトではありましたが、私はなによりも次に繋げるための財産だと考えています。反省点や改善点を見つけることは団体としても個人としても次にどうしたらよいのかという具体的な行動に繋がります。参加者からも目的を明確にすることの大切さを知り物事の本質を考えるために熟考するようになった、これから自分たちは何をすべきなのかなど、自分自身を向き合うきっかけになったという声を多く聞くことができました。これらは、彼らの成長への第一歩になることでしょう。私達のこれらの成長が他者の成長へ貢献し、影響の輪を広げ社会へ貢献できると信じ、総括とさせていただきます。

2014 年 11 月

第 5 回国際協働プロジェクト (ISAP05) 実行委員長 石井 志帆

第 6 章

第 5 回国際協働プロジェクト予算書
第 5 回国際協働プロジェクト決算報告

6-1 第五回国際協働プロジェクト予算書

支出内訳(案)

1.活動運営費

(単位:円)

国外活動運営費		
滞在費	現地交通費、宿泊費、食費 19 人分	1,235,000
企画活動費	資材費	40,000
小計		1,275,000

国内活動運営費		
交流活動費	資材費、交流会諸費用	20,000
小計		20,000

2.実行委員会運営費		
交通費	遠方者への援助費	80,000
会議費	合宿宿泊費、会議室費	100,000
広報費	資材費、印刷費	7,000
Tシャツ費	Tシャツ 19 人分	38,000
小計		225,000

総計		1,520,000
----	--	-----------

収入内訳(案)

(単位:円)

参加費	19 人分	1,330,000
財団助成金	(未定・申請中)	150,000
ISAP04 繰越金		40,000
小計		1,520,000

総計		1,520,000
----	--	-----------

6-2 第5回国際協働プロジェクト決算報告

会計（決算）

支出内訳

1.活動運営費

（単位：円）

国外活動運営費		
滞在費	現地交通費、宿泊費、食費 19 人分	1,235,000
企画活動費	資材費	19,992
小計		1,254,992

国内活動運営費		
交流活動費	資材費、交流会諸費用	11,180
小計		11,180

2.実行委員会運営費		
交通費	遠方者への援助費	154,410
会議費	会議室費	11,200
広報費	資材費、印刷費	7,000
Tシャツ費	Tシャツ 19 人分	29,268
ISAP05 繰越金		38,581
小計		240,459

総計		1,506,631
----	--	-----------

収入内訳

(単位:円)

参加費	19 人分	1,311,000
財団助成金		150,000
ISAP04 繰越金		45,631
小計		1,506,631

総計	1,506,631
----	-----------

第 5 回国際協働プロジェクト(ISAP05) 事業報告書

発行責任者：石井 志帆(第 5 回国際協働プロジェクト 実行委員長)

編集責任者：橋本 望 (第 5 回国際協働プロジェクト 広報部長)

発行元：日本国際学生協会 国際協働プロジェクト
